

Title	三条西実隆 『再昌草』と漢籍
Author(s)	中村, 健史
Citation	京都大学國文學論叢 (2019), 41: 1-14
Issue Date	2019-04-01
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/243772">https://doi.org/10.14989/243772</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 三条西実隆『再昌草』と漢籍

中村健史

1

三条西実隆は康正元年（一四五五年）、父公保の次男として生まれた。六歳にして家督を相続。後土御門、後柏原、後奈良の三朝に歴仕して学才をうたわれ、のち内大臣に昇った。和歌、連歌をはじめ、書や香の道にもくわしく、室町後期を代表する文人として知られる。天文六年（一五三七年）、薨去。享年八十三。

実隆の和歌は家集『雪玉集』に八千首余を収めるほか、『再昌草』<sup>(1)</sup>と称する日次詠草三十数巻が残っており、『私家集大成』に翻刻された分だけでも七千首をこえる（連歌や漢詩なども含む）。特に後者はあまりの数の多さから、長らく研究は手つかずの状態にあったが、近年、伊藤敬氏による大永四年条の注が『新日本古典文学大系 中世和歌集 室町篇』（岩波書店、一九九〇年）に、同じく元龜元年、二年、三年および天文五年条の注が『和歌文学大系 草根集／権大僧都心敬集／再昌』（明治書院、二〇〇五年）に収録され、ようやくまとまったかたちで作品を読める環境がととのった。しかし、これら二書にはなお出典未詳とされる歌が散見し、解釈にもいまだ検討の余地があ

るように思う。

本稿ではそのなかからいくつかの例を取りあげ、考証を加えてみたい。

2

市商客

誰も知れ市のなかなる文見てもあはれ名をうる道はある世を

（『再昌草』）

文龜元年八月十四日（一五〇一年）の詠。詞書に「前左大臣家兼光春日の法楽とて勧められし」。伊藤氏『和歌文学大系』の注は、典拠として『晋書』をあげる。

誰もが知ってほしい。市の中の書き物により、なんと名声を得る道のある世の事を。○市―売買が行われ人の多く集まる場所。○商客―商いに来た人。○うる―「売る・得る」の掛詞。▽「洛陽の紙価貴し」（晋書）の故事による作。

いわゆる「洛陽の紙価を高からしむ」とは、文苑伝にしるされた以下の逸話である。

司空張華見て歎じて曰く。班張の流なり。之を読む者をして尽くして余り有り、久しくして更に新たならしむと。是に於て豪貴の家競ひて相伝写し、洛陽之が為に紙貴し。

〔司空張華見而歎曰。班張之流也。使讀之者盡而有餘、久而更新。於是豪貴之家競相傳寫、洛陽爲之紙貴。〕

張華が左思の「三都賦」を読んで「これは班固、張衡にもおとらぬ名作であつて、一読余韻さめやらす、日を置いて感銘新たなものがある」と稱賛したところ、洛陽の貴頭がきそつて筆写し、紙が値上がりした、という。

しかしながら、「三都賦」は「市のなか」にあつたわけではない。たしかにそれは一躍作者の「名」を高めはしたものの、実隆の詠みぶりとはいささか逕庭がありはしないか。

この歌は、『史記』呂不韋伝に見える故事を踏まえたものである。

呂不韋乃ち其の客をして人々聞く所を著はし、論を集めて以て八覽、六論、十二紀二十余万言を爲らしむ。以為らく、天地万物古今の事を備ふと。号して呂氏春秋と曰ふ。咸陽の市門に布き、千金を其の上に懸け、諸侯の游士賓客を延き、能く一字を増損する者有らば千金を予へんと。

〔呂不韋乃使其客人人著所聞、集論以爲八覽、六論、十二紀二十

餘萬言。以爲備天地萬物古今之事。號曰呂氏春秋。布咸陽市門、懸千金其上、延諸侯游士賓客、有能增損一字者予千金。〕

秦の豪商呂不韋は、食客の見聞をまとめて『呂氏春秋』をあらわし、咸陽の市の門にかけて、「一字でも増減する者がいれば千金を与える」と約束した。

「市のなかなる文」とは「咸陽の市門に布き」を踏まえた表現である。また、『呂氏春秋』が「名をうる」ための著述であつたことは、この前段に「是の時諸侯弁士多し。荀卿の徒のごとき、著書天下に布く（是時諸侯多辯士。如荀卿之徒、著書布天下）」と見える。当時の諸侯はきそつて士をやしない、なかには天下に名だたる書を成すものもいた。無教養な「商客」はそれがうらやましかつたのだろう。

一首の大意は、「咸陽の市門にかけられた書きものを見て、世に声望を得る道はあると分かるだろう。呂不韋のような男でさえ、文名を立てようと志したのだ」。

なお、この故事はもとの文脈を離れ、師恩をあらわす表現として用いられることも多い。『再昌草』には宗祇歿後、宗長から形見の「金をおこせたれば」として

我が身こそ千々の黄金を報いても思ふにあまる人の恵みを

〔『再昌草』補遺一七七〕

「わたしこそ、千金によつて報いたとしても、なお足りないほどの恵みを受けたのだ」という歌もある。

廿九日、禁中の花の下にて遊び侍りしつとめて、美濃の僧雲門といふ者に遣はし侍りし

偶酌春風并四難 偶と春風に酌して四難を并せ、  
禁園花下養衰殘 禁園花下衰殘を養ふ。  
白櫻片片天如雪 白桜片々として天雪ふるが如く、  
吹作岐陽九月看 岐陽九月の看を吹き作す。

〔再昌草〕補遺七一

文龜二年二月（一五〇二年）の作。『和歌文学大系』の注に

たまたま春風の中に酒を酌み、四難を併せ、禁裏の花園の下で、衰殘のわが身を慰める。白桜の花片は、空に雪のごとく舞い散って、岐陽の九月の景色を吹きなしている。（中略）○四難—仏語。仏に出会い、教えを信ずるまでの四つの苦難。「并四難」の意不詳。○養—心身をいたわる。○衰殘—衰え弱った身。○白桜—夜目に見る桜花を言うか。○岐陽—岐山（中国陝西省）の南、周祖古公が都を置いた地。（こ）は日本の美濃・岐阜の南の地と関係はないか。五句の意不詳。○九月看—未詳。

という。このうち「意不詳」とされている「四難を并せ」は謝靈運「魏太子の鄴中集の詩に擬す」序の「天下の良辰、美景、賞心、樂事、四者並び難し（天下良辰、美景、賞心、樂事、四者難並）」（『文選』卷三十所収）が典拠である。よき時、美しい景

色にめぐりあつて、心からこれを味わい、楽しむことは難事だが、「禁中の花の下にて」の遊宴は四者をあわせるものであつた、というのである。次句とともに、老境の作者が、遣いがたき瞬間にめぐりあつた感動をあらわす。

一方、やはり「未詳」となっている結句は、蘇軾「九月二十日微雪、子由弟を懷ふ」二首其一に基づく。

岐陽九月天微雪

岐陽九月天微かに雪ふり、

已作蕭條歲暮心

已に蕭條たる歳暮の心を作す。

短日送寒砧杵急

短日寒を送り砧杵急に、

冷官無事屋盧深

冷官事無くして屋盧深し。

愁腸別後能消酒

愁腸別後能く酒に消し、

白髮秋來已上簪

白髮秋來已に簪に上る。

近買貂裘堪出塞

近ごろ貂裘を買ひて出塞するに堪へ、

忽思乘傳問西蹊

忽ち思ふ伝に乗じて西蹊を問ふを。

東坡は嘉祐六年（一〇六一）年、制科に及第して鳳翔府簽判に任じられ、以後四年にわたつて同地にあつた。そのとき、弟蘇轍に贈つたのが右の詩である。（こ）岐陽では九月に微雪が降り、すでにものさびしい歳末の風景がひろがっている。大した仕事もないまま、酒に愁えを消しているが、秋以來すっかり白髪になつた。かむごろもを買つたから、西方に旅して武功を立てようか。

岐陽（鳳翔）は現在の陝西省にあり、気候はなほだ寒冷であつたらしい。『四河入海』に引く一韓智勳の説に、「岐陽ハ鳳翔ゾ。西ニ蜀方ヨリゾ。サル程ニ大ニ寒シテ早ク雪ガフルゾ。サ

ル程二九月ノ時分ナレドモハヤ十一月十二月ノヤウナゾ(卷七之一)という。すなわち「岐陽九月の看」とは、冬でもないのにうす雪の降るさま、実隆の場合でいえば、春の空に「白桜片々として天雪ふる」がごとき光景を言うものに違いない。

「春風のうちに宴して、偶然にも良辰、美景、賞心、樂事をあわせ、禁園の花のもと、老残の身を養うことができた。桜の花びらは雪のように散り、蘇軾がうたった岐陽九月のすがたを眼前に描きだす」。

4

三月尽雨降りたりしに、夜に入りて「春尽雨中」と

いふことを

花に慕ひ鳥にかこちし春の雲も雨となりてや今日の暮れぬ  
る

〔再昌草〕補遺九二)

文龜二年三月三十日の詠。『和歌文学大系』注に以下のごとくある。

花かと見て慕い、帰る鳥の名残を惜しんだ雲も雨となつて、春も今日で暮れてゆくよ。(中略)○春尽雨中——漢詩の一句か。○上句——花落随<sub>レ</sub>風鳥入<sub>レ</sub>雲(和漢朗詠集・三月尽・尊敬)によるか。

出典未詳とされている句題「春尽雨中」は、李昌符「旅遊傷

春」(『三体詩』所収)に基づく。

酒醒郷關遠

酒醒めて郷關遠く、

迢迢聽漏終

迢々として漏の終るを聴く。

曙分林影外

曙は分かる林影の外、

春盡雨聲中

春は尽く雨声の中。

鳥倦江村路

鳥は江村の路に倦み、

花殘野岸風

花は野岸の風に殘る。

十年成底事

十年底事をか成せる、

羸馬厭西東

羸馬西東を厭ふ。

また三、四句の「春の雲も雨となりて」という言いまわしは、

宋玉「高唐賦」の「妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。且には朝雲と為り、暮れには行雨と為り、朝々暮々、陽台の下にあり(妾在巫山之陽、高丘之阻。旦爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下)」「文選」卷十九所収)を意識するに違いない。巫山の仙女が「あなたのもとに日々姿を変えてあらわれましょう」と約束したように、朝、浮かんでいた雲が夕方には雨となつた、というのである。

「散る花を慕い、帰る鳥を悲しんだ春の終わり、雲は雨となつて、三月最後の日は暮れてゆくのだろうか」。句題もさることながら、むしろ朝雲暮雨の故事こそが一首の趣向であろう。

5

七夕鳥

今宵かもその山人の笛竹を雲井に誘ふ葦田鶴の声

『再昌草』一四三

文龜三年七月七日（二五〇三年）、正親町三条実望亭で行われた歌会での一首である。「山人」は一条兼良『連珠合璧集』に「山にすむ人をいふ。又仙人をも云」とあり、ここでは後者。また、「葦田鶴」は鶴のこと。「田鶴は蘆の中にあれば、あしたづといへり」（宗祇『古今和歌集二度聞書』）  
すでに伊藤氏が

七夕の今宵だろうよ。その山人の吹く笛の音を雲井の空に誘う鶴の声が聞こえるのは。○その「その」具体性未詳。故事あるか。○山人の笛竹―漢語「樵笛」の訳語。「山人」は仙人か。○雲井―星合の空を言うか。また当日の禁裏恒例の御楽（於議定所）を念頭ににしての詠か。天皇は笙を御所作（演奏）。

と指摘されているとおり『和歌文学大系』、二句以下は典故を踏まえた表現である。劉向『列仙伝』にいう。

王子喬なる者は周の靈王の太子晋なり。好んで笙を吹き鳳凰の鳴を作す。伊洛の間に遊び、道士浮丘公接して以て嵩高山に上る。三十余年後之を山上に求むるに、桓良に見えて曰く、我が家に告げよ、七月七日我を緱氏山巔に待てと。時至つて果して白鶴に乗り山頭に駐る。之を望みて到るを得ず。手を挙げて時人に謝し、数日にして去る。

（王子喬者周靈王太子晋也。好吹笙作鳳凰鳴。遊伊洛之間、道士浮丘公接以上嵩高山。三十餘年後求之於山上、見桓良曰、告我家、七月七日待我於緱氏山巔。至時果乘白鶴駐山頭。望之不得到。舉手謝時人、數日而去。）

「王子喬は周の靈王の太子であつたが、笙を好み、道士浮丘公の弟子となつて嵩高山にのぼつた。三十年あまりして人々が探したところ、家人に「七月七日、緱氏山上で待つておれ」と伝言があつた。はたして当日、白い鶴に乗つて山頂にあらわれたけれど、だれもそこにたどりつくことはできない。手をあげて挨拶し、数日後、去つていった」。

実隆のいわゆる「山人」は王子喬を指す。「今宵」、すなわち七月七日は彼が緱氏山に舞いくだつた日であり、そのとき乗つていたのは「鶴」であつた。また、第三句に見える「笛竹」は、「好んで笙を吹き」という記述と対応しよう。『日葡辞書』に「笛・詩歌語」とあるとおり、和歌では笛一般、あるいは特に龍笛を指す場合が多いが、『再昌草』には笙の名人であつた豊原統秋を

雲の上に古りにし道を笛竹の間こえあげける名こそ高けれ

『再昌草』四五二六

「笛竹の道によつて名をあげた」とたたえた例がある。全体を通釈すれば以下のとおり。「ゆかりも深いこの七夕の宵に、雲井の空にあつて王子喬の笙を誘うのは、彼が乗つていくという鶴の鳴き声だ」。

なお『正徹物語』には、頓阿が息子に「七夕にはさだまりて詠む鳥侍る物を」とさとし、「七夕鳥」題で鶴の歌を詠ませた、という逸話が見える。正徹は

か様に二条家には、少しも異風なることを嫌ふなり。七夕鳥ならば幾度もかささぎを詠むべし。星・鶴ながら、いかにも風情を珍しく取りなさむと心ざすべきなり。これが先づはよき体にもあるなり。

二条家では、星や鶴といったありきたりの題材しか詠まない。ただそれを風情めずらしく取りなすのに力を注いでいる」と批判するが、これから言えば、織姫、彦星にまつたく触れず、王子喬をうたった『再昌草』はよほど異風である。<sup>(1)</sup>

江戸時代の歌人、烏丸資慶は「雪玉集、随分当流のすがた也。ちとあたらしき趣也」(『資慶卿口授』『雲上歌訓』)と述べている。実隆にとつては、もはや「よき体」よりも新しみを求めることに大きな意味があったのだろう。時代は大きく変わりつつあった。

6

硯

墨筆をさぞあだものと見る石のおのれ静かに世を尽くしつ  
つ

(『再昌草』二三四)

文龜三年十月五日、同じく正親町三条実望亭の月次歌会で詠まれた作品で、『雪玉集』二五八七にも収める。『和歌文学大系』の注は次のとおり。

墨と筆を、さぞや移ろい易い物と見る硯。硯自身はゆつくりとわが生涯を終えて行く。○あだ物―はかない物。▽「硯・墨筆」は新しい題・歌語。消耗摩滅度の対比で人生を寓する。

結句「世を尽くしつ」は『新古今集』の「白波の寄する渚に世を尽くす海人の子なれば宿も定めず」(雑下・一七〇三、よみ人知らず)を踏まえた表現で、生涯を終えるの意。また「見る石」は「硯」の字を二つに分けたもの。「むべ山風を嵐といふらむ」式の言葉遊びである。

さて、和歌ではふつう、言葉に尽くせないほど深い思いを表現するために

四方よちの海を硯の水に尽くすとも我が思ふことは書きもやら  
れじ

(『新勅撰集』雑二・一一三八、藤原俊成)

「四方の海をことごとく硯の水にしたとしても、わたしの気持ちは書きあらわせない」とうたう。伊藤氏の指摘するように、墨や筆を使って「消耗摩滅度の対比で人生を寓する」のは新しい詠みかたである。そのような発想を作者は何から得たのだろうか。

『古文真宝』後集・卷五に唐庚「古硯銘」という文章がある。

硯と筆墨とは、蓋し気類なり。出処相近く、任用寵遇相近きなり。独り寿夭のみ相近からざるなり。筆の寿は日をもつて計へ、墨の寿は月を以て計へ、硯の寿は世を以て計ふ。

其の故は何ぞや。其の体為るや、筆は最も鋭く、墨之に次ぐ。硯は鈍き者なり。豈に鈍き者は、いのちなが寿くして鋭き者は、なまじしぬるに非ずや。其の用為るや、筆最も動き、墨之に次ぎ、硯は静かなる者なり。豈に静かなる者は、いのちなが寿くして動く者は、なまじしぬるに非ずや。吾れ是に於いて養生を得たり。

(硯與筆墨、蓋氣類也。出處相近、任用寵遇相近也。獨壽夭不相近也。筆之壽以日計、墨之壽以月計、硯之壽以世計。其故何也。其爲體也、筆最銳、墨次之。硯鈍者也。豈非鈍者壽而銳者夭乎。其爲用也、筆最動、墨次之、硯靜者也。豈非靜者壽而動者夭乎。吾於是而得養生焉。)

「筆、墨、硯は出処進退をもつにする仲間であるが、耐用年数はひとしくない。筆は日をもつて、墨は月をもつて、硯は世をもつて寿命をかぞえる。なぜだろうか」と説きおこし、「そのさまを見るに、筆はもつとも鋭く、墨はこれに次ぎ、硯は鈍い。そのはたらきを見るに、筆はもつとも動き、墨はこれに次ぎ、硯は静かである。つまり、鈍く、静かなものは長持ちし、鋭く、動くものは若死にするということではないか。これこそ養生の法にほかならない」と述べる。硯の用を「静かなる者」と表現すること、その齡が「世」によって数えられること、墨や筆を「天」すなわち「あだもの」ととらえること、いずれも『再昌

草』と共通する。典拠は「古硯銘」と考えてほぼ誤りないだろう。

一首は「墨や筆をはかないものと見る硯は、世をもつて数えるみずからの命を、ひとり静かに生きている」の意。なお、実隆の子、公条も同じ本説を踏まえて

静かなる心を知らば硯にも飽かぬ齡をしいて契らん

(三条西公条『称名院家集』一五一六)

「心静かに生きることむねとすれば、硯のように長寿を保つ」と詠んでおり、さらに江戸時代に入ると

硯のみ命なりけりと思ふかな誰が世の文の四つの友とて

(藤原惺窩『惺窩集』一五七)

比ぶとも君が齡ぞまさるべき硯の石のかたき命に

(若むらさき 七〇六、斎藤三友)

我が仲はなほ逢ふことやかたからん硯の石の世を尽くすとも

(小沢蘆庵『六帖詠藻』一三三五)

君にこそたぐへては見め常磐なる硯の石の命長さを

(村田春海『琴後集』一二五一)

といった作品が見られるようになる。後水尾院は『麓木鈔』のなかで「詩集にて歌学になるは、三体詩、古文真宝、朗詠、其外には余なし」と語っているが、「朗詠」(『和漢朗詠集』)はともかく、『三体詩』や『古文真宝』はやはり時代の好尚と言うべ



きだろ。う。

実隆の和歌は近世を先取りするものであった。

7

二月十日、中書王御会始、鶯声和琴

折にあへば水の下の調べをも花にやうつす春の鶯

『再昌草』四五二二

大永四年二月十日（一五二四年）の作。伊藤氏『新大系』によれば、詞書の「中書王」は伏見宮貞敦親王を指すとのことである。以下、氏の注釈を引く。

春の時節にあうといつも、氷下の水の調べをも移し取らせようにして、鶯が花に鳴いている。（中略）○鶯声和琴 底本「鶯到和琴」。この歌題は他に例がない。○氷の下の調「水調」（中国の楽府の曲名、日本の舞楽曲の調子の一つ）と早春の氷下水流を合わせた語か。▽氷下の水流を知って谷を出る鶯や、舞楽曲「春鶯囀」などで仕上げた巧妙な作。

問題となっている「氷の下の調べ」は、白居易「五弦弾」『白氏文集』卷三所収）を踏まえた表現であろう。五絃の琴をうたつたこの詩には、

第一第二絃素索 第一第二の絃は素々たり、

秋風拂松疎韻落

第三第四絃冷冷

夜鶴憶子籠中鳴

第五弦聲最掩抑

隴水凍咽流不得

秋の風松を払つて疎韻落つ。

第三第四の絃は冷々たり、

夜の鶴の子を憶うて籠の中に鳴く。

第五の絃の声は尤も掩抑せり、

隴水の凍り咽んで流るることを得ず。

という一節があり、古くからよく知られていた『和漢朗詠集』管絃・四六三に収める。『再昌草』の典拠となっているのは「隴水の凍り咽んで流るることを得ず」の句で、楽府「水調」とは無関係である。「隴水の川が氷るとき、流れは滞り、水の音はむせぶがごとく響く。第五の絃はかく重々しく沈鬱だ」。室町時代の注釈には以下のように見える。「五ノ絃ヲカキナラスニ、一々ニ其徳アリ。（中略）第五ノ絃ハ、羽ノ位ニシテ、少シトゞコヲレリ。辟（へ）バ、滝ノ水ノ、氷リニセカレテ 滞（とど）ムガ如ク、ヲチカヌル如ト云也」『和漢朗詠集仮名注』。そもそも実隆の歌は「鶯声和琴」、すなわち、鶯の声は琴のように聞こえるさまを詠んだものである<sup>(1)</sup>。一首の中心にあるのは、「季節がめぐり、氷の下にむせぶ水の響きは、花に鳴く鶯の声へとうつりかわる。どちらにも琴の音色そっくりだが」という機知ではなかったか。

8

古寺路

塵の世の道絶えけりな住む人も橋を過ぎじの谷の心に

『再昌草』四六七〇

大永四年七月二十七日、「禁中月次御会懷紙」三首中の一。『新大系』の注に

俗世の人の往来も絶えた道であるよ。寺に住む人も俗世との架け橋を通るまいとの出離の堅い心によつて。(中略)

○橋を過じ 故事あるか、未詳。○谷の心 「衆籟曉興林頂老 群源暮叩谷心寒」(和漢朗詠集・下・山・大江以言)の「谷の心(そこ)」を、山林生活者の心とした語か。未詳。

とあるが、この歌は虎溪三笑の故事を踏まえるものではないか。以下、『古今事文類聚』前集・卷三に収められた『廬山記』の文章を引く。

不過虎溪 遠法師廬阜に居ること三十余年、影山跡を出でず、俗に入らず。客を送りて虎溪を過ぐるに輒ち鳴号す。昔陶元亮栗里山南に居り。陸修静も亦た道有るの士なり。遠師嘗て此の二人を送り、与に道を語り合ひて覺えず之を過ぐ。因りて相与に大笑す。今世三笑図を伝ふ。

(遠法師居廬阜三十餘年、影不出山跡、不入俗。送客過虎溪輒鳴號。昔陶元亮居栗里山南。陸脩靜亦有道之士。遠師嘗送此二人、與語道合不覺過之。因相與大笑。今世傳三笑圖。)

晋のころの話である。浄土教の祖として知られる慧遠は、廬山に住んで俗界との交わりを断ち、客があつても虎溪の橋までしか見送りをしなかつた。しかし陶淵明と陸修静が寺に來たと

きには、話しこんで「覺えず之を過」ぎたため、三人で大笑したという。

『再昌草』にいわゆる「塵の世の道絶えけりな」は「影山跡を出でず、俗に入らず」という慧遠の暮らしぶりを指すのである。一首の大意は「俗世との道は絶えてしまったことだ。この山に住む人もまた、慧遠のように虎溪の橋を過ぎまいと思つているので」。

ちなみに『雪玉集』には

谷深み橋を過ぎじの誓ひだにあればある世をなど渡るらん

『雪玉集』七三六三

「俗塵を避け、深谷の橋を越すまいという誓いを立てた人さえているのに、なぜ世の中に立ちまじわるのだろうか」という歌もあつて、肖柏がこれに「三笑事、珍重、珍重」と批語をしるしている。

なお、室町期における三笑説話の展開については、朝倉尚氏「虎溪三笑」考(『禪林の文学——中国文学受容の様相——』所収、清文堂出版、一九八五年)、樹下文隆氏「作品研究『三笑』」(『観世』五四一九、一九八七年九月)などにくわしい。

## 9

閨中月

秋風に忘れし閨の扇をも月にたぐへてまたや取らまし

『再昌草』四六九一

大永四年九月十三日、「内にて題を探りて五十首歌講せられし」四首中の一。『雪玉集』一三〇にも収める。伊藤氏『新大系』は

秋風の涼しさに捨て忘れた閨(ねや)の中の扇を、月にたぐえ添えてまたも手に取り持とうか。▽「月隱<sup>レ</sup>重山<sup>レ</sup>、擊<sup>レ</sup>扇<sup>レ</sup>喻<sup>レ</sup>之」(摩訶止観)に拠る表現。円形の扇(団扇)を月に喻えることは多い。「秋」に「飽き」を掛け、月・扇を名残とし、「被<sup>レ</sup>忘恋」の趣のある作。

と注釈するが、はたしてこの歌は『摩訶止観』の文に基づくと考えてよいのだろうか。たしかに「月重山に隠れぬれば、扇を撃<sup>あ</sup>げて之に喻ふ」は『和漢朗詠集』仏事・五八七にも採られており、有名な句ではあるが、氏の指摘するような恋の情趣とは無縁である。

閨の扇といえは、むしろ班婕妤の故事がふさわしい。『文選』のなかに彼女のつくった「怨歌行」という詩がある(巻二十七所収)。

新裂齊紈素 新たに齊の紈素を裂けば、  
皎潔如霜雪 皎潔として霜雪の如し。  
裁爲合歡扇 裁ちて合歡の扇と為せば、  
團團似明月 団々として明月に似たり。  
出入君懷袖 出でては君の懷袖に入り、  
動搖微風發 動搖しては微風発る。

常恐秋節至 常に恐る秋節至り、  
涼風奪炎熱 涼風の炎熱を奪はんことを。  
棄捐篋笥中 篋笥の中に棄捐せられ、  
恩情中道絶 恩情中道にして絶えなん。

「霜雪のごときしらぎぬを裂いて扇をつくる。まるいかたちはお月さまのよう。あなたの懷に入つて微風を起こす。こわいのは、秋。炎暑が過ぎれば箱のなかに捨て置かれ、愛情もなかばにして絶えてしまふでしょう」。実隆のいわゆる「秋風に忘れし」は「常に恐る秋節至り、涼風の炎熱を奪はんことを」「篋笥の中に棄捐せられ」を、「月にたぐへて」は「団々として明月に似たり」を踏まえる。

もっとも婕妤の詩には「閨」が出てこない。しかし、それは「班女が閨の中の秋の扇の色(班女閨中秋扇色)」という詩句によつて、歌人にはなじみ深い表現であつた(『和漢朗詠集』冬・三八〇・雪、橘在列)。

あらためて全体を通釈するならば、「涼しい秋風が吹くようになり、忘れさられた扇だが、月に似たそのかたちによつて再び手に取つてみよう」。十三夜にひかれて昔の女のもとを訪れてみたい、という恋の歌でもある。

なお『再昌草』には

夜を経ては閨の扇もよそに見ん月待ちえたる秋の初風  
〔再昌草〕補遺(二八)

という作品もあるが、これはより直接に「怨歌行」の初二句を

踏まえるもの。伊藤氏『和歌文学大系』には

夜を重ねるとやがて闇で用いた扇も無用と思うだろう。秋の初風に月を待ち見る頃は。○闇―寢室。参考「吹きにける闇の扇も今朝はまだ置きあへぬものを秋の初風」(雪玉集)。○月―初秋七月の月。

とのみしるす。

10

打ちなすに花を催す調べをも手にまかせてし鼓とぞ聞く

『再昌草』四七一(一)

大永四年九月三日、雅楽頭豊原統秋の二七日にあたり、追悼のために詠んだ作。熱心な法華信者であった故人をしのび、「妙法蓮華経(めうほうれむけきやう)」を句首に置いた十首歌の「う」にあたる。伊藤氏『新大系』に

打ち鳴らすと花を誘い咲かせるといふ調べまでも、思うままに手で打った鼓だと聞くよ。○花をもよほす調べ。未詳。鼓の難曲の名か。参考「滝の響も有明の 月の夜神楽 花の粧」(曲舞・鼓の滝)

とあるが、この歌の本説は羯鼓催花の逸話であろう。『古今事文類聚』前集・巻六に『羯鼓録』からの引用として以下のこと

くある。

羯鼓催花 明皇の時、春景明媚なり。帝曰く。此に対して豈に他と判断せざるべけんや。命じて羯鼓を取り自ら曲を製し春光好と名づく。柳杏を回顧すれば皆な発く。笑ひて曰く。此の事我を喚びて天公と作さずんば可ならんや。

(明皇時、春景明媚。帝曰。對此豈可不與他判斷。命取羯鼓自製。曲名春光好。回顧柳杏皆發。笑曰。此事不喚我作天公可乎。)

玄宗が春景の美しさを感じて「春光好」という羯鼓の曲を作り、みずから奏したところ、柳は芽吹き、杏は花ひらいた。そこで自慢して「どうだい、わたしは天の神さまみたいじゃないか」。

当時、相当よく知られた故事だったらしく、策彦周良に「明皇羯鼓を撃ちて花を催すの図」(『策彦和尚詩集』所収)という題画詩がある。

二月驪宮雨始晴 二月の驪宮雨始めて晴れ、

催花一曲最關情 花を催す一曲は最も情に關はる。

君王祇道春光好 君王祇だ道ふ春光好しと、

變作漁陽鼙鼓聲 變じて漁陽鼙鼓の聲と作る。

「楊貴妃と春光をめでていると、いつの間にか兵鼓が鳴りひびいていた」というのは、「長恨歌」を踏まえた表現であろう。「漁陽の鼙鼓地を動し來り、驚破す霓裳羽衣の曲(漁陽鼙鼓動地來、驚破霓裳羽衣曲)」。狩野一溪の『後素集』には

羯鼓樓図 又云羯鼓催花図 玄宗と貴妃と楼上にして羯鼓をうち給へば時來らざるに諸木花咲を見体。

としるされているが、果たして詩人が目にしたのはどのような絵だったのだろうか。

なおまた、実隆の出詠した「三十二番職人歌合」には、獅子舞の歌として「戯れて春の木陰に舞ふ獅子のたたく鼓に花も咲き添へ」(三)が掲げられている。判詞に「鼓の声も咲くを催す心は、唐土の羯鼓樓の春をも思ひよせぬるにや」。正統的な和歌には例がとぼしいが、後水尾院に「鶯の声の鼓ももしきや軒端の花にかけて急がん」(後水尾院御集「一四八」とあるのは、鶯の声が鼓のごとく花を咲かせるの意に違いない。『謡抄』にも「羯ハ、エビス也。エビスノ打鼓乎。然ドモ、玄宗モ羯鼓ヲ打テ、花ヲ催ス也」(東岸居士)とあった。冒頭の一首にもどれば、「花を催す調べ」とは玄宗のつくった「春光好」の曲を指す。おおむね「打つことによつて花を咲かせる」という名曲まで、思うままに奏した羯鼓の腕前であった」というほどの内容であろう。

ちなみに『再昌草』には

羯鼓樓寒連夜雪

何時一曲得催花

羯鼓樓寒くして連夜の雪、

何れの時か一曲花を催すを得ん。

『再昌草』補遺四三〇)

「連夜、雪が降りつづいて、羯鼓樓のあたりはまだ寒い。催花

の曲を打つのはいつのときであろうか」という詩もある。

11

病中偶作

八十老身俄中風、  
捨毫咄咄只書空  
太平縦遇生無用  
却笑新豊折臂翁

八十の老身俄かに中風、  
毫を捨て咄々として只だ空に書く。  
太平縦ひ遇ふとも生くるに用無く、  
却つて笑ふ新豊折臂の翁を。

〔再昌草』補遺一七六五)

天文五年四月下旬(一五三六年)の作。『再昌草』二月条に「過ぎにし五日より、中風といふことに心地損なひて、手足かなはざりしかば」(補遺一七五四)とあるとおり、この年、八十二歳の実隆は病に臥した。その感懷をうたった詩である。『和歌文学大系』に以下の指摘がある。

八十路の老身、にわかにながらぬ中気でまますならず。筆を置き驚き嘆きつづ、ただ空に書をなす。太平の世にもし出遇うも、生きる事は無用。却つて嘲笑うだるう、かの新豊折臂の翁は。○毫―筆。○咄々―舌打ちする様子。○却―反対に。同情ではなく。○新豊折臂翁―白楽天の新樂府の作品名。自ら臂を断つて徵兵を免れた新豊の翁の物語(白氏文集・卷一)。

今、問題としたいのは、結句の解釈である。もとより典拠が

「新豊折臂翁」であることについて異論はないのだが、はたして「却って嘲笑うだろう、かの新豊折臂の翁は」という訳文は正しいのだろうか。

『再昌草』から例を挙げるならば、

妻兒相對一盃中　妻兒相對す一盃の中、  
可笑白鬚顏欲紅　笑ふべし白鬚顏紅ならんと欲するを。

『再昌草』一七九一

は「酔って老顔が赤らむのを（妻子が）笑う」の意であり、

村村花柳本無私　村々花柳本と私無く、  
可笑人間分賤貴　笑ふべし人間の賤貴を分つを。

『再昌草』三〇〇四

は「人の世に貴賤のへだてがあることを、花や柳が笑う」のである。「笑」字の下に示される内容は、かならずその目的節であった。先に掲げた詩もまた「新豊の翁がわたしを笑う」のではなく、「わたしが翁を笑う」と考えるべきではないか。

新豊の翁は、徴兵をのがれるためみずから腕を折った。しかし、

此臂折來六十年　此の臂折れてより 来<sup>このかた</sup>六十年、  
一肢雖廢一身全　一肢廢すと雖も一身全し。  
至今風雨陰寒夜　今に至るまで風雨陰寒の夜、  
直到天明痛不眠　直ちに天明に到るまで痛みて眠らず。

痛不眠　痛みて眠らざれども、

終不悔　終に悔いず、

且喜老身今獨在　且つは喜ぶ老身の今独り在るを。

「六十年たつても、いまだに傷が痛んで眠れない夜がある。だが、腕と引きかえに命をまつとうしたのだから、悔いはない」と語る。戦乱を生きぬき、静かに老いを養う老人にとつては、どんな姿になろうと生きていること自体が尊く感じられるのだつた。

他方、実隆はどうか。「大平縦ひ遇ふとも生くるに用無く」、たとえ平和な時代にめぐりあつたとしても、こんな有様では生きる意味がない、と彼はいう。中風のせいで筆さえ持てないのだからつらい状態には違いないが、そのような人生観は白詩の対極にあるといつていい。理想の生でなければ「無用」だと考えるとき、「一肢廢すと雖も一身全し」という自足は笑うべきものになつたのだろうか。やりきれない浅薄さである。

大意は以下のとおり。「齢八十に及んでわかかに中風をわすらつた。筆をとることもできず、ただ舌打ちしていぶかしむばかり<sup>(六)</sup>。たとえ聖代にめぐりあつたとしても、これでは生きている甲斐がない。一肢を廢して命をまつとうしたという新豊の翁を、かえつてわたしは笑う」。

[注]

(一) 以下、『再昌草』のみは『私家集大成』の歌番号を掲げた。

(二) ただし小川剛生氏『正徹物語 現代語訳付き』（角川学芸出版、二〇一二年）には、「実際には頓阿は「七夕鳥」の題で（中略）

鶏や鶴も詠んでおり、鵲だけしか許容しなかったというのは誇張であろう」という指摘がある。

(三) 「春鶯囀」の曲名を踏まえ、鶯の鳴き声を琴にたとえることは、古く白居易に「林鶯何れの処にか筆の柱を吟ずる（林鶯何處吟筆柱）」（『和漢朗詠集』春・柳・一〇二）の例があり、『再昌草』にも次のような詩が収められている。「黄鶯語る処花を隔てて深く、錦繡簾前琴を操するに似たり（黄鶯語處隔花深、錦繡簾前似操琴）」（一〇三八）。

(四) 吉沢義則氏『頭註後水尾院御集』（仙寿院、一九三〇年）、鈴木健一氏『和歌文学大系 後水尾院御集』（明治書院、二〇〇三年）

などの先行注に出典の指摘はない。

(五) なお、実隆はこのとき同題で二首の詩をつくっている。『私家集大成』ではあわせて一篇の七律と解するが、韻、内容から考えて従いがたい。七絶二首として施注された伊藤氏『和歌文学大系』の見識に従うべきである。

(六) 第二句は、晋の殷浩が桓温の陰謀で失脚したとき、終日空に「咄々怪事」と書いてばかりいた、という故事による（『晋書』殷浩伝）。この条、某氏の示教による。記して謝す。

（なかむら たけし・神戸学院大学人文学部准教授）